

大连理工大学二〇〇四年硕士生入学考试

第 1 页

《 翻译与写作 》 试题

共 5 页

注: 答题必须注明题号答在答题纸上, 否则试卷作废!

第一部分

設問 1 次の文を読んで後の問いに答えなさい。

日本語の「音節」を構成する要素は、(1.)と(2.)に分けられる。(1.)は音節の中心的要素となり、日本語には(3.)種類の(1.)があるとされている。一音節の中で、(2.)は通常(1.)の前に現れ、一部の例外を除いて後に現れることはない。したがって、日本語の音節は「開音節」を基礎としていると考えられる。特殊な子音として、ひらがなで「ん」と表記される(4.)音と呼ばれる子音がある。これは子音であるにもかかわらず、例えば俳句を作る場合等、他の音節と同じく一つの単位(拍)として数えられることから、日本語は音節を基礎とする言語ではなく、拍を基本とする言語であると言われることがある。その他の子音としては、「っ」と表記される(5.)音があり、一部の言語を母語とする外国語学習者にとって習得が困難な音として知られている。

問 1. (1.) ~ (5.) の空所に適する日本語の語句を次から選びなさい。(5 点)

ローマ字、 母音、 音韻、 撥、 子音、 促、 拗、 5、 6、 4

問 2. 「ヘボン式」と呼ばれるローマ字では「さ」行を「sa, shi, su se so」, 「た」行を「ta, chi, tsu, te, to」と表記し、「訓令式」と呼ばれるローマ字では「さ」行を「sa, si, su, se, so」, 「た」行を「ta, ti, tu, te, to」と表記する。「ヘボン式」と「訓令式」の表記法の違いを説明した上で、それぞれのローマ字表記の方針の差異について中国語で説明しなさい。(10 点)

問 3. 下線部()の記述について、中国人学習者を対象に、実際に困難かどうか、また困難な場合はなぜ困難なのか日本語(100 字程度)で説明しなさい。(10 点)

設問 2 次の各項目を読んで、後の問いに答えなさい。

1. 人称代名詞が動詞の活用と呼応している。
2. 名詞の性が動詞の活用と呼応している。
3. 述語が常に文末に位置する。
4. 修飾語は常に被修飾語の後に位置する。
5. 待遇表現(敬語表現)が発達している。
6. 前置詞が発達している。

問1. 上の6つの項目の中で日本語の特徴として適切なものを全て選びなさい。(5点)

問2. 上の6つの項目の中で「語順」に関する記述を2つ選びなさい。また、それらの項目の基準にしたがって、日本語と中国語を観察し、両言語の似ているところ、違うところを中国語で説明しなさい。(10点)

問3. 上の「5. 待遇表現(敬語表現)が発達している。」の項目について日本語と中国語を比較し、相違点について日本語(200字程度)で論じなさい。(10点)

設問3 次の語句を日本語の例を示しながら中国語で説明しなさい。(20点)

1. 主題
2. 助詞
3. 外来語
4. アクセント
5. アスペクト

設問4 次の文章を読んで、下線部()を日本語に訳しなさい。(20点)

語料庫言語学*是一门独具特色的语言研究学科。語料庫言語學以語料庫為手段來研究語言。語料庫是作為信息載體的大量語言資料的集合。語料庫中的語料可以是為了特定目的而收集的語言資料(如採訪記錄,或特定範圍內的書面材料),也可以是為了普遍的语言研究目的而收集的語言資料(如大量自然會話的轉寫資料和各種報刊雜誌書籍的文字資料)。傳統的结构主義語言學很早就重視專門語料的收集,並使用它們來描寫音位和單句。然而,語料庫語言學的方法與傳統的方法不太一樣,而且研究語料主要目的也不是描寫音位和單句用法,而是為了描寫和解釋語言中的詞匯和句法的各種問題,以及處理自然語言的各種課題。目前,計算機語料庫可以貯存和處理億萬字符的語料。語言研究者可以根據研究課題的要求,使用賦碼手段和檢索工具,分析語料庫中的語料,對語言現象進行定量與定性的分析。(潘永標導讀‘語料庫語言學’)

*語料庫語言學:コーパス言語学

第二部分

設問5 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

人間の赤ちゃんは普通誰でも言語が話せるようになる。人種や国籍などに関係なく、育った環境で話されている言語を、比較的短期間の内に苦もなく自然に自分のものにしてしまう。生成

文法理論では、この母語を獲得する能力を人間という種に共通に備わった本能の一部であると捉えている。すなわち、人間の言語活動を可能にする何らかのメカニズムが脳の中にプログラムされていると考えられるのである。日本語も世界中のその他の言語も、脳の中に組み込まれた本能の産物である以上、表面的な違いは脳が作り出す範囲内での違いであって、それを逸脱して、ある言語だけが「特殊」であったり「特別」であったりするとは考えにくい。したがって、言語の表面的な違いに対して感情的に優劣の判断をすることは、言語の本質とは何ら関わりのないことである。我々は、人間の言語の本質とは何かを探究し、自分の話す言語の特徴を正確に理解することによって、個別の言語に対する根拠のない偏見を取り除くことができるはずである。同様のことは人間の社会や文化についても言えるのではないだろうか。人間は社会を作り文化を持つ動物である。個別の社会や文化においてそれぞれ違った特徴があることは認められるが、それに対しても優劣はつけられないのである。自分の属する社会や文化に対する確な理解と、他の社会や文化を尊重する姿勢を持つことが、愚かで無意味な偏見や差別などを排除する第一歩となる。(吉田智行「日本語は特殊な言語ではない」より一部改変の上抜粋)

問1 下線部()を中国語に訳しなさい。(5点)

問2 この文章で筆者が言いたいことを100字程度の日本語に要約しなさい。(10点)

設問6 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

最近若者の間で「告白する」を短縮した「コクる」ということばがつかわれることがある。この「コクる」を()の中に入れてみてほしい。必要なら形を変えてもかまわない。

- (1) そんなに好きなら、()てみたら?
- (2) 自分から()らないほうがいいんじゃない?
- (3) 今()れば、うまくいくかもしれないよ。

ほとんどの人が(1)「コクっ(て)」、(2)「コク(ら)」、(3)「コク(れ)」と答えたのではないだろうか。このように一見当然のように見える語形の変換でも、日本語を勉強している外国人学習者がこの問題を解こうとすると、まず「コクる」がどの動詞グループに属しているかを考え、次にその動詞グループの活用ルールに沿って「て形」や「ない形」や「ば形」を作るといった意識的作業をしなければならない。これに対して、日本語の母語話者なら、たとえそれが「コクる」のように本来のことばを短縮し、限られた人にしか使われていない若者ことばでも、誰もが同じように、無意識に、しかも瞬時に活用できるのである。なぜならば、そこには私たちが普段意識しないで使っている共有された「ことば」のルールがあるからである。

このような「ことば」のルールをまとめたものが、私たちが教科書で目にする「文法」である。私たちが「ことば」のルールを意識するのは主に外国語を勉強するときであるため、あたかも「最初に文法ありき」と思いがちだ。つまり、何者かによって決められた「ことば」のルールがまず存在し、それに従って皆が話したり書いたりしていると考えてしまうのである。し

かし、「文法」とは、皆が使っていることばを観察することでルールを見つけだし、それを記述してできあがったものである。また、母語話者は普段意識せずにそのルールを使いこなしているため、改めてそのルールをつきつけられると「難しい」と感じてしまうことがある。しかし、それは裏を返せば、母語話者はそれだけ難しいことをいとも簡単にやってのけるコンピューターを頭に内蔵していると言えるのだ。そして、これは文法に限ったことではなく、私たちが日常使っていることばを改めて見ると、文字、音、文法から使いかたまで様々なルールがあることがわかるだろう。(飯野公一、他「新世代の言語学」より一部改変の上抜粋)

問1 下線部()を中国語に訳しなさい。(5点)

問2 この文章で筆者が主張する内容に従って、「文法」とは何かを100字程度の日本語で定義しなさい。(10点)

第三部分

設問7 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

インターネットは世界中にはりめぐらされ、膨大な数の人たちがネットワークで結ばれている。そこには種々のグループが形成され、情報交換がなされ、議論がなされている。欲しい情報もインターネットで探せばかなりのものが入手できる。しかしインターネットの世界は圧倒的に英語であり、このようなサイバースペースにおいて日本語は現在どのような位置づけであり、将来どうなっていくのだろうかという疑問が生じる。今日かなりの日本人が必要最小限の英語使用能力をもち、英語でインターネットに積極的にかかわっているが、その時の英語がそれほど上手なものでなくてもある程度用がたりているようである。

インターネットの世界では情報がすぐに相手に伝えられるということから、すぐに応答しなければならないといった気持ちを人に抱かせるのか、あるいはインターネット上の表現はいずれすぐに消されてしまうからという心理があるのか、英語を母国語とする人もけっして立派な英語で書くとは限らない。文法的に間違っていることも多く、スラングも現れるし、会話的な中途半端な表現であることも多い。世界中の人々がインターネットを英語で使うようになると、その英語はかなり変形し、本来の英語ではないような国際英語となっていくのかもしれない。

しかし、インターネットを利用する人全てが英語を使えるわけではないので、機械翻訳システムを利用せざるをえない。機械翻訳システムは既に述べたように不完全な訳しか出せないが、多くの人々が不完全な英語表現でやっているのであるから、機械翻訳の存在価値はあり、その価値はシステムの質の向上とともにこれから増していくにちがいない。また一方では使い方に工夫をすることによって、機械翻訳システムの翻訳の質を向上させることができる。たとえば日英翻訳システムに与える日本語文章を、一文一文かなり短いものとし、できるだけ省略を少なくし、主語、目的語、補語や述語を明確に表現すれば、かなりよい英文を出すことができる。初めはめんどうであるが、人は徐々にそのような文章を書くのになれていくだろう。その結果、長々とした文や微妙な表現で意味がはっきりしない文は使われなくなっていく可能性がある。

こういったことは特に音声による人間と機械との対話システムにおいて顕著に現れるだろう。パターン化された表現は確実に翻訳されるようになるから、今でも若者の間に存在しているある種のステレオタイプの表現がこのような環境ではますます盛んになってゆく可能性もある。(長尾真「言語情報と言語情報処理」より抜粋)

第一部分

問 1. 下線部 () を中国語に訳しなさい。(10 点)

問 2. 下線部 () の記述に対する各自の意見を日本語(400 字程度)で述べなさい。(10 点)

設問 8 次の 2 文は中国人学習者が書いた日本語文の例である。これらの文について、以下の問に答えなさい。

(1) そのような考えを持つ人は少ないである。

(2) 君が大学を出るときには、僕はとっくに死んだ。

問 1. これらの文に含まれる誤りを指摘し、正しい日本語になおしなさい。(5 点)

問 2. それぞれの文について、学習者がその誤りを犯した理由を日本語(字数は自由)で説明しなさい。特に(2)については、中国語から日本語への「言語転移」という観点から考察しなさい。ただし、その際に中国語の例文を含めてもよい。(5 点)